

「なにくそ」と頑張がんばった五人の兵

一 体を大事にしまいや

わたしは大正十三（一九二四）年に生まれた。

山口四二連隊にゆうえいに入営したのは、敗戦の八か月ほど前の昭和十九（一九四四）年十二月十日だった。

入隊して十日目の夜、週番の将校しょうこうが、

「長野ながのはいるか？」

と言った。何事かと緊張きんちやうして返事をする、将校しょうこうは小声で、

「お前のおふくろが馬小屋の後ろに来ているから会ってこい。歩哨※ほしやうに見つかるなよ」

と、思いがけない、うれしい知らせに馬小屋まで走った。

暗闇くらやみの中、鉄条網てつじやうもうご越しに二つのシルエットがゆれていた。歩哨ほしやうのいないことを確かめると、小声で

「よい」

と声をかけた。母は、

「安ちゃんか」

と言った。

「今夜立つのか、何時ごろ」

わたしは言葉につまった。

「それは、分からない」

※歩哨……見張りをしている兵士

「元気でやりまいの」

短い会話だった。胸がいっぱいになって言葉も出ない。

姉が、鉄条網越しに投げてよこしたタバコをポケットにねじこむと、後ろを見ずにかけもどった。

その夜更けに緊急呼び出しが出た。

いよいよ出発だ。覚悟をしていたので動揺はなかった。

昭和十九年十二月二十日、午前二時だった。

門を出て、おどろいた。

門前の沿道には、息子の名を呼ぶ声であふれていた。

息子たちは母親の声を聞き分けていただろうか。隊列をはなれることは許されなかった。何百人も同じ服装をしていれば、親でも見分けはつかなかっただろう。

まして夜なのだから。

ちょうど山口駅前やまぐちに来たときだった。多くの声こゝろに混まじって、

「安ちゃん！ 安ちゃん！」

必死よに呼よんでいる声こゝろがした。

あれはおふくろの声だとすぐ分かった。

運良く乗車待ちのときだったので、班長はんちようの許可きよかをもらって改札口近くにいた母

と姉の元もとにかけよって、

「よい」

と声をかけた。

母は突然とつぜん現あらわれた息子こゝろにびっくり。あふれる涙なみだをおさえながら、

「体を大事だいじにしまいや、元気でやりまいや」

ほんの一言の短い会話かいわだった。

「じゃあー、行いってくるで！」

と言いったとたん、涙なみだがあふれた。落ちそうな涙なみだを必死よでこらえて、真まつ暗くらな中なかをか

けもどった。

二 血まみれの特訓

下関しものせきまでの時間は短かった。

関釜かんぶ連絡船れんらくせんに乗るまでの長い長い通路。

妻つまと別れをおしんでいる中村君なかむら。

連絡船れんらくせんの手すりにもたれて、おなかの大きな彼女かのじよをだいて泣いている中野君なかの。

それぞれの別れの悲しみを背負せおった若い兵わかを積みこんだ連絡船れんらくせんは、汽笛かきも鳴らさ

ずに玄界灘げんかいなだへと旅立たびだっていった。

連絡船れんらくせんで釜山①②に入港、待ち受けていた列車①②に積みこまれた。

行き先①②は南京なんкин。南京なんкинに到着とうちやくして空襲くうしゆうでボロボロになった四階建ての貨物倉庫ぶが

宿舎しゆくしゃになった。床ゆかは土ぼこりがまうほどで、その上にマットしを敷しいて寝起ねおきした。

朝起きてみると顔や鼻の穴あなまで真っ黒。笑うに笑えない。

朝ご飯がすんだころには、B 29が五機、所かまわず爆弾をばらまいていく。我々はおびえながら土手にふせる。そんな生活をくり返している中で、軍の方針が決まったのか、中支（中国の中支）の奥地にいる本隊に合流する先発隊と残留組に別れた。わたしたちは、藤六八六部隊の先発隊。南京を徒歩で出発したのは、昭和二十一年一月上旬だった。みんな初年兵ばかり、千人余りの集団だ。

走る汽車もなかったのか、漢口まで一か月あまりの行軍で、一日四十キロほど歩かされた。行軍中、アメリカの戦闘機が飛んできて機関砲を撃ってくる。あわてて高粱畑に飛びこむ。この弾に当たると腕でも足でも吹っ飛んでしまう。

アメリカの空爆におびやかされ、食事も一食のご飯が、飯盒の中蓋にすり切り一杯と漬け物。恐怖と空腹にへとへとになりながら貨物列車にやっと乗ることができて孝感に着いた。孝感から宜昌に向けての行軍中に足に肉刺ができて歩けなくなる

※初年兵……入隊してから一年以内の兵
※高粱……中国産のモロコシ

者が出た。わたしは仕方がないので彼の背囊を背負って行軍した。

やっと明日は宜昌という所まで来たとき、「転属命令」が出て、再び孝感に引き返すことになった。孝感では砲身の重さが百キロ近くある大砲を打つ練習。失敗するとなぐられる。また、飛行場をすみからすみまで、はいずり回る訓練。半袖に半ズボンで、はいずり回るのだから、ひじやひざは皮がむけて血まみれ。手当てする薬もない。

三 突然の終戦

一期の検査が終わって星が二つの一等兵になったころ、本隊が宜昌の山奥から下ってきた。そこで隊の編成替えがなされ、北へ向けて移動する準備が行われた。

わたしは第三中隊、そこで苦楽を共にする有吉、太田、石田、中村の四君といっしよになる。同じ初年兵同士という気安さもあつた。

我々の中隊長金子中尉は、剣道三段、柔道四段、空手三段という猛者で、浪花

節ぶしが大好きだった。わたしは浪花節なにわぶしの物真似ものまねが少しできたのでよく可愛かわいがられた。酒も飲ませてもらったりして、特別待遇たいぐうだった。これが古兵こへいのねたみをかい、シベリアでひどい目にあうことになる。

いちばん恨うらんでいたのは、同じ中隊の上等兵で、わたしが栄養失調になり、だんだん動けなくなるころをねらって徹底的てつていてきにいじめられた。

昭和二十年六月十二日、我々われわれは弾薬だんやくや米などを背負せおい、闇やみの中を密ひそかに旅立った。もう雨季に入っていたが、雨も降ふらず静かな出発だった。

一か月余あまりの夜の行軍が実施じっしされた。四十五分歩いて十五分休憩きゅうけい。四日歩いて一日休憩きゅうけい。夜の行軍も終わりに近づいたころ、脱走兵だつそうへいが出た。

三人一組になって中国人の民家や高粱畑コーリヤンをさがし回った。この夜から、我々われわれ五

※背囊はいのう……革かわやズックなどで作った、物品を入れて背負せおうもの
※古兵……長く軍隊にいる兵士

人の初年兵の悲劇が始まることになる。

あまりにもものどがかわいて、民家の庭の井戸水を飲んでしまったのだ。

「生水は飲むな」

の先輩の古兵の注意を忘れていた。

夜が明けて井戸を見た五人は

「しまった！」

と絶句。

井戸水は石灰をとかしたように真っ白。

五人は下痢が続き、みるみる衰弱していく。薬は正露丸しかない。

五人とも長い行軍のつかれで体力も限界にきていたため、下痢は止まる兆しはない。

い。酒井軍医の薬は、生のニンニクたった一切れ。浪花節どころではない。

真つ暗闇の中で突然銃声が起こった。初年兵の自殺だ。銃口をのどに、足の親

指で引き金をおさえるのだが、確実にあの世に旅立つことができた。下痢や古兵た

ちのピンタにたえきれなかつたのか、行軍中に四件も起きた。

このような地獄の行軍も何とかぐりぬけて、新郷駅から満州の四平街まで今度は汽車の旅だった。どんなにほっとしたことがか。

四平街の広い公園でテント生活が始まった。

そこでひどい屈辱にあった。

近所の子供が我々のテント生活をめずらしそうに近寄ってきた。そのとき、満鉄の奥さんたちが目の色を変えて大声でしかつたのだ。

「日本の兵隊さんに近寄っては駄目！ 虱がうつるでしょ」

二か月の行軍。殺虫剤もなく、行水ばかりで部隊全員が虱を背負っていたのだ。日本のため、市民を守るためと訓練を続けてきた我々の気持ちをふみにじる言葉、その満鉄の職員も、引揚げの逃避行には我々と同じ思いをすることになるのだが、そのときは、お互い、そんなことを知らなかつた。

※満鉄……南満州鉄道株式会社のこと

テント生活も四、五日で終了。

ソ連軍侵入の知らせにより、五十キロもはなれた戦車隊の兵舎に移動した。

昼食ぬきで夕方五時までの強行軍に、我々五人は「なにくそ」と頑張った。

もう気力だけしか残っていない。夕方兵舎に着き、装具を外すとすぐ、トーチカづくりに取りかかった。古兵は元気だったが、弱り切っているわたしたちはスコップをふみこむ力もない。

古兵にピンタを食らっても動く気力すらなかった。明くる日から全員でトーチカづくりをした。八十パーセントほど完成したのは、八月十五日の昼前だった。

畑に出てきた中年の人が、

「アンタたち、もうそんな馬鹿なことはやめなさい。今日戦争が終わったのです。

さつきラジオで放送がありましたよ。わたしたちもどうなるか分かりません」と肩を落として去っていった。

悲しげな集合ラッパの音色と共に日本の敗戦が告げられた。

全員スコップを投げだして、へなへなと座りこんでしまった。

敗戦になつても、わたしたちは出撃命令を待った。

銃をだいて一晩中眠らなかつた。ソ連軍になぐりこみをかけるつもりだつた。

しかし、出撃命令は出なかつた。

四 仲間との別れ

ソ連側より、五キロ以上もはなれている所に二十四時間以内に移動せよと命令が出た。そこで、武装解除！

ただ、ただ、お国のため、天皇陛下の御ためと、どんな苦しみにも「なにくそ」と命をかけて国を守ってきた。この戦争は聖戦だと信じてきた。それが負けたとは！
急にいかりと、くやしさが全身をつきぬけた。

※トーチカ……敵の攻撃を防ぐためコンクリート造りで、内部に機関銃などを備えたもの
※武装解除……17ページの注を参照

小銃を粗末にしたといつては、上官からブツなぐられたその小銃を、わたしはコンクリートに思いつきりたたきつけた。そのくやしきはわたしだけではなかつた。何千丁という小銃がたたきつけられた。

兵器の返納が終わると、今度は病気の兵士たちの診断。ほとんどの兵士が下痢による栄養失調。そのほとんどが初年兵だった。

診断の結果、わたしを除いて有吉、石田、太田、中村の仲間たちは、四平街の陸軍病院に入院と決まった。永い間苦勞を共にたえ、はげまし合つた友人たちとの別れは断腸の思いだ。

それにしても、なぜ、わたしだけが、と酒井軍医をうらんだ。

この体で凍てつくシベリアに連行されたら、おそらく生きて帰ることはできないだろうと思つた。無念で涙も出なかつた。

だが、運命とは何と不可思議なものだろう。

陸軍病院に入院して、体力を回復したと思つた有吉君たちはかえらぬ人となつて

しまったのだ。

後の話によると、暴動ぼうどうによって医療品いりょうひんや食料全部がなくなつたため、満足な治療りょうもできず、おそらく餓死がししたのではないかとのことだった。くやし涙なみだが止まらない。ただひたすら四人の冥福めいふくを祈いのつた。

あわただしいうちに、もう九月になつた。

ソ連軍の将校しょうこうがやってきた。

ソ連に持ちこむ荷物の点検てんけんがあり、大隊の編成へんせいが発表された。わたしは第六大隊になつていた。

第六大隊の兵員列車は、「瓊瑋じゆうけん」という駅に着いた。

巨大な川アムール、川霧かわぎりに、はるかにかすむ「アラゴベシエンスク」に、兵たちは固唾かたずをのんだ。

一抱ひとかかえもある丸太を組んだ筏いかだに、馬三頭、トラック一台といっしよに乗せられ、

ブラゴベシエンスクに着く。駅にはまだ列車が着いていない。テントを張^はって列車の到着^{とうちやく}を待つ間、空^{そら}がくもり、ドツとピンポン玉^{ひょうちやく}ほどもある雹^{ひょう}の直撃^{ちやくげき}を受けた。それがわたしたちを出迎^{でむか}えるあいさつだった。

貨物列車にぎゆうぎゆうに積みこまれた千五百人の兵士たちは、身動きもできない。しかし、戦争に負けても古兵^{わか}と若い兵^{わか}との間の差別は変わらなかった。

古兵は、大の字に寝^ねて、我々^{われわれ}若い兵^{わか}は座^{すわ}ったまま眠^{ねむ}った。抑留^{おくりゆう}とはいえ、軍服の襟^{えり}にはまだ星^{ほし}（襟章^{えりしやう}）が残^{のこ}っていた。何かといえは、ビンタ^{びんた}が飛^とんできた。人の温^{ぬく}もりなどまったく感じたことはなかった。

絶望^{ぜつぼう}と、くやしさを乗せた貨物列車の出発は、昭和二十年九月二十五日だった。列車は西へ西へと走り、やがてバイカル湖^{こはん}の湖畔^{こはん}へ着いた。

しかし、この時点ではソ連側の受入れ準備^{じゆんび}はできていなかった。

あれた野原^のが広が^{ひろ}がって、待合室^{まちむろ}もプラットホームもない、駅とは名ばかりの

所だった。

「二時間停車するから飯を炊け」

と命令が下る。

米を研ぐ水は、機関車用の給水塔から。燃料は枯れ草だけだ。千五百人の飯盒炊さんでは枯れ草はまたたく間になくなる。

この辺りから、上等兵のいじめはますますひどくなった。おそいと言つては力任せに毎日なぐる。顔は、はれて見る影もない。だれも助けてはくれなかった。ただたえるしかなかった。半煮えのご飯ができたころには出発準備。停車時間が三十分しかないことが三日も続いた。ご飯を炊く時間もなく生米にジャガイモをかじつてみたが、お腹はいっぱいにならなかった。

※抑留……無理やりに連れていかれて収容されること
※襟章……洋服の襟につけて職階や所属などを表示する印

十月十二日、やっとカラガンダ駅（註）に到着した。

一か月もかかった貨車の旅だった。駅には氷が張っていた。

物めずらしげに寄って来た子供たちに小石を投げられながら、収容所までとぼとぼ歩いた。みじめだった。

この収容所の名前は「カラガンダ九十九地区第六ラゲリ分所」。

そこで、各将校たちは軍刀などの所持品いっさいが没収された。わたしたちも日用品の歯ブラシ、はさみ、ちり紙まで没収された。

入所後二週間足らずのうちに栄養失調で亡くなるものは、ほとんどが若い兵ばかりだった。かれらは、「お母さん」と故郷の母を呼び、死んでいった。

わたしも入院していた。しかし、薬もない名ばかりの病舎だった。

第六ラゲリ、カラガンダの収容所は、警戒が嚴重だった。三重の鉄条網、四

※ラゲリ……田ソ連の強制収容所

隅にはサーチライトが取り付けてあり、常に警備兵が目を光らせていた。少しでも内側の鉄条網に近づくと、容赦なく鉄砲の弾が飛んできた。元気なものは、炭鉱組に編成されて入坑したようだった。

わたしはずっと下痢が止まらず、いよいよ死ぬのかと覚悟を決めていた十月末、役に立たない病人、百人といっしょに療養所行きとなった。外は小雪だった。

毛皮つきの外套にくるまって朝九時出発。到着は午後五時。真つ暗な中、療養所に向かう。ドイツ、チェコ、ルーマニア、日本と、四か国の人たちが集まっていた。ここで生と死が分かれた。薬らしきものはなく、食事も、岩塩のスープ、飯盒の蓋に一杯の粟がゆに黒パン一切れ。毎日同じメニューだった。

夢も希望もなくした若い兵士たちは、やせ細って、ローソクの灯が消えるかのようになりに静かに死んでいった。

療養所で、親身になって世話をしてくれたドイツ人の衛生兵が、「希望を捨てるな、生きろ」とはげましてくれた。ある日、楽器を手に慰問に来てくれた。その日

はクリスマス。

流れだした世界の名曲。そして最後の曲は「荒城の月」だった。祖国を遠く、異国の地で日本の曲を聞こうとは思わなかった。感無量で兵士たちは、みんな涙した。

半年後、昭和二十一年五月。わたしは元気になり、再び第六ラゲリにもどった。翌日から炭鋳勤務。それから二年間、ロシア娘のワリーヤとヘルタちゃんにはげまされ、助けられながら、頑張った。小さい時から演劇が好きだったわたしは、ラゲリ劇団に入れてもらい、炭鋳の三交代をやめて地上勤務となる。

零下四十度にも下がる凍てついた中を、線路の工事夫、線路の雪除けの重労働にもたえられたのは、

「生きろ、希望を捨てるな」

※サーチライト……反射鏡で遠くの方を照らす照明装置

※衛生兵……7ページの注を参照

※慰問……なぐさめ、はげますこと

と言った、ドイツの衛生兵えいせいへいやロシア娘むすめのはげましの声。そして、

「体を大事にしまいや」

と、わたしを常に遠くから見守り続けてくれた母のおかげだ。

長い苦しい四年の月日が流れたある日、今日からいっさいの作業は中止する、との命令が出た。どうも日本に帰れるらしい。にわかには活気づいた。身辺整理が始まった。うれしい反面、わたしには心残りがあった。炭鉱たんこうでは、明るい笑顔えがおではげまし勇気づけてくれたワリーヤたちに、「ありがとう」のお礼とお別れが言えないことだった。仕事以外では、収容所しゅうようじょから外に出られないからだった。

苦しかった四年間。この収容所しゅうようじょを後にしたのは昭和二十四年九月二十七日だった。カラガンダを出たのは昼前。行くときは三十日かかったが、帰りは十九日だった。明けても暮くれても荒涼こうりょうとした大草原へを経て、バイカル湖畔こはんを過ぎ、ナホトカナホトカに到着ちやくした。海を見るのは、何年ぶりだろう。

引揚船ひきあげせんの順番待ちの間も、わたしたちを遊ばせてはくれなかった。きびしい労働が待っていた。しかし、苦しみの先には、故郷こきやうに帰れるという希望が待っていた。

わたしたちを乗せた引揚船「永徳丸」えいとくまるは、一路祖国そこく日本へ！

昭和二十四年十一月四日の午後、ようやく舞鶴まいづるに上陸した。

山あり川あり、日本の景色は美しかった。

数々の苦難くなんを乗り越え、こうしてわたしは今あるのは、常に遠くから見守り続けてくれた母や家族たち。生きろとはげまし続けてくれたドイツの衛生兵えいせいへいやロシア娘むすめワーリヤたちのおかげだ。

十六歳さいで故郷こきやうを後にしてから八年、わたしの青春は「なにくそ」の二文字につきるかもしれない。

(原作 長野安廣「シベリア回想五人の兵」)